



…『漫筆』…
雨に有る語

「全くだよ、大分前の新聞に記された旅行印象記見たいなもののが出てゐたね、それにさゝ此の頃の移住民諸君も昔の様にマンチメント。カファーの話ばかりではなく、仲々に余裕綽々なるものがあつて嬉しかつた。なんて書いて居たがホントウは嘘だねアソナ事を云つて暗に皮肉られてゐるんだがドレモコレモ自度いの鉢合せで根づから馬耳東風さハハハ……」

「而し何んだよ、これも前のビン的の話と同様、習慣なるものが一種の型になつちまつたんだから吾々の頭その儘で攻撃したり輕蔑したりするのも無理な事かもしけれないね」

「それ見給へ、即ち僕の云ふ動かざる一種のローカルカラージやないか」

「いや、そうじやない、それ程歴史的のものじやないよ、又一般的のものじでないね、だがね、破壊が困難だから退軍するといふ程の簡単な問題でもないと思ふね」

「で」

「只猛烈はあるのみだ、奮然起つて地方改良の實を擧げるんだ」

「君一人で」

「一寸貧弱かな」

「成功するかもしえないよ、その背面を振り立つて獅子吼すればね」

「お真面目なんだぞ」

「ハハ……」
雨は慕るらしい、K
すてゝそれを踏にじる。
「第一まだ、出稼娘性な
テモ坂らねばならぬ者も
まだ頭にコピリ付いてゐ
いんだ。即ちこれが根柢だ
日本だつてアラジルだつ
切を支配してゐんだ。生
活する上に考へるうえで
日本にはまだ大分の距離があ
るよ」
「だがね、境遇の關係上
腰を据へることの出来
面しだね。生活する上に
も居るんだから一概に云
ふさ」
「永住せよとは云つてゐ
そりや君の云ふ様に日本
に腰を据へることの出来
ないじやないじやないか、
も居るんだから一概に云
ふさ」
「どうだね」
「だからいけないんだ、
本的の誤謬から破壊する
脇掛式の生活をする必
要いやないか」
「そりや、そうだね」
「だからいけないんだが、
「嫌なんだね、自分では
意してゐるんだが」
「気が弱いんだよ」
「そうかも知れないね、
…………」
「一寸瞬間に危険状態に陥
るが」
「例の奴だよ」
「鐵拳カアハハ……馬鹿
「頼むよ、どうも君は熱
いけど、もつとゆつくさ
ないよ、眞面目で仲々
「嫌なんだね、自分では
意してゐるんだが」
「ア、それがだよ、僕
自かも知れないんだが、
「よ、疑ふ事などはしない
れども、疑ふ事などはしない
年にも君の云ふ様な人間
はないよ、眞面目で仲々
ものもあるよ」と私
ふる人間は無く幸福だろ
ね——許してお呉ね——許し
れ——微かに私が悪かな
居るから失禮するわ（
…………沈黙が續く……
…………」
「止めて頂いたい、變な
うとする」
「まだ俺は用がある」「
抱きつく」

かたなハハ……ど
ては台なしだね
か、試みにそん
るがいゝ。サア
フェーがどうじ
どうじや、まる
シの様な勢じや
あるうだね、僕
さして舊移民病
るんだよ」
移民病患者か、
なんの男は舊移民
白いね、而し有
あるうだね、僕
じ席に二時間も
フェジョン、ア
テ切れるになるだ
變つて行きさう
二、
最後限なし
歌壇 ◇
野義塾 ◇
原 歌 生
詞 原 歌 生
不二の嶺
湧き出でし
比ひなき
國民に
流るとき
さを
りてより
五千載
東ゑるの
なからんや
胸に充つ
夫が妻に要求す
がある、死にそ
ても夫の要求だ
か進まうと倒れ
かが「反抗しやう
する事も出来ぬ、
やうとする」
春日井 春曉 ◇
朽木 春日井 春曉 ◇
春近 イベイ

東京式 製藥 <small>北西線</small>	モ <small>薬品豊富に 調剤正確に</small>	CASA Minematsu <small>—Araçatuba—</small>	<small>△最新式設備</small> 向 <small>プロミツ</small>	東 北西線 <small>○内 貿農</small>	CASA Ichinose <small>Araçatuba</small>	CASA Japoneza <small>OKADA & OTA</small> <small>Caixa, 106 Rua São Luís, 83</small> <small>Est. Marília Paulista</small>	Hotel e Bar <small>Alto Cafetal</small> バホ
---	--	---	--	--	--	--	--

